



Middle East within Asia

Booklet Series

No. 7 (2011.3)

日本のアジア地域研究シリーズ

岸本美緒「一橋大学の中国社会研究」



ニーズ対応型地域研究推進事業

アジアのなかの中東：経済と法を中心に

本ブックレットは、第74期一橋フォーラム「日本の思想・一橋人の文明観ーアジアと世界のへのまなざし」（2010年5月ー7月、全10回、東京都千代田区一ツ橋・如水会館）での第8回講演（7月13日）岸本美緒「一橋大学の中国社会研究ー村松祐次・増淵龍夫両教授を中心に」の録音テープを起こし、それに修正を加えたものである。講演を録音し、そのブックレットとしての刊行を許可してくれた社団法人如水会に感謝いたします。

（ニーズ対応型地域研究推進事業

「アジアのなかの中東：経済と法を中心に」事務局）



故 村松祐次先生
昭和48年4月撮影



増淵龍夫名誉教授

一橋大学の中国社会研究

司会…「日本の思想、一橋人の文明観」、本日は、お茶の水女子大学教授の岸本美緒先生に講師をお願いいたしました。村松祐次先生、増淵龍夫先生、この両先生のお話を中心に、「一橋大学の中国社会研究」という題でお話をいただきます。岸本美緒先生は、東京大学大学院人文科学研究所博士過程を経て、東京大学東洋文化研究所の助手になりました。先週お話ししていただいた原洋之介先生がご所属の研究所です。その後、お茶の水女子大学文教育学部専任講師、助教授、東京大学文学部教授などを経て、現在はお茶の水女子大学の教授をなさっております。では岸本先生お願いいたします。

岸本…ご紹介にあずかりました岸本と申します。今日こういう形で一橋大学の中国社会研究ということでお話させていただくことになりましたけれども、実は私は、村松祐次先生、増淵龍夫先生の両先生のどちらも、一度もお目にかかったことがございません。そういう人間がなぜこういう形でお話させていただくことになったかということ、少し自己紹介をさせていただきたいと存じます。私の専門は、中国の明末から清代前半の社会経済史です。明末から清代前半とは、日本では大体江戸時代くらいにあたるころでございます。物価とか、経済変動、地域社会、民事裁判など、社会経済的な事柄について研究しております。村松先生は、19世紀から20世紀、おもに清末及び中華民国時代の経済に

ついて研究しておられ、また増淵先生は、中国のずっと古代の歴史を研究しておられたので、私の対象としている時代とは違いますが、若いころから両先生の御本にひじょうに影響を受けてまいった者でございます。私は、ただ今ご紹介いただきましたように、東京大学の東洋史学科という、いわゆる文学部の歴史学の出身で、最初の就職は東京大学の東洋文化研究所の助手をやっております。この東洋文化研究所というのは、前回の原洋之介先生のお話によれば、訳の分からないことをやっている人間がたくさんいるところということになります。私が、私などは、その訳の分からない者の一人でございます。実は、この研究所にいたころの助手仲間が、このフォーラムのコーディネーターでいらつしやいます、加藤博さんでございました。その時にいろいろお世話になりましたので、加藤さんからやれと言われると、私としてはお引き受けせざるをえない、というわけでございます。その後、お茶の水女子大とか、東京大学とかで中国史をやってまいりましたが、全体といたしますと、いわゆる文学部の歴史学というところでございまして、いわゆる経済理論とかそういうものはあまり勉強したことがない、そういう人間でございます。経歴からいいますと、一橋大学とはあまりご縁が無くこれまで過ごしてまいりました。ただ、正確に言いますと一度だけ、1980年代に私は物価のことなどを研究しておりましたので、中川学先生に呼んでいただきました。非常勤講師をやらせていただいたことがございます。私は経済学の知識など全然無いものですから、一橋大学の元氣な学生さんから、ケインズがどうしたとか議論をふっかけられるのではないだろ

うかと、最初は内心ドキドキしながら講義に行つたのですけれども、あにはからんやと申しましょうか、受講者名簿に載っている方々は、百人近くおられました、私の話がよほどつまらなかったのでしょうか、実際に出てゐる方々は毎回十指に足りないほどでしたので、今日は何人出てきてくれるか、むしろこちらのほうが心配でございました。ですので、毎回講義の前には国立駅前のレストランで昼間から一杯ひっかけた元氣をつけて講義に行つたりしておりました。そういう私でございますが、関心というのは大きく言いますと、中国社会論ということでございます、今まで感銘を受けた研究者の方を何人か挙げるといわれましたら、必ず挙げさせていただくのが、増淵龍夫先生、村松祐次先生、滋賀秀三先生という三人の方々であります。増淵龍夫先生の『中国古代の社会と国家』、これはたいへん有名な御本でございますけれども、私がこの本の存在を知りましたのは、小倉芳彦先生の『中国古代政治思想研究——『左伝』研究ノート』という中国古代史の本をたまたま拝見したことがきっかけでした。そもそも私が東洋史学科に入りましたのは、司馬遷の『史記』とか、中国の古代史に興味がありましたもので。すると、その前書きか後書きのところに、増淵先生の研究は素晴らしい研究であることとか、増淵先生はテニスなどもお上手で、非常に切れ味の鋭いテニスをなさるとか書いてありましたので大変興味をひかれまして、増淵先生の御本を読みました。それでひじょうに衝撃を受けまして、学問というのはこういうものなのだ、できるかはわからないけれども、自分もこういうことをしてみたい、というふうに思つた次第です。それが、私

が大学2年のとき、1972年のことでございました。大学を卒業後、大学院で物価のことなどを研究しておりましたときに、今度は村松祐次先生の、『中国経済の社会態制』という御本を読みました。これは本来ですと1949年に出した御本ですが、1975年に復刊されました。その時、実は私は村松先生のお名前を存じ上げませんでした。たまたま本屋で見かけて買い、拝見しました。これにもまた非常に衝撃を受けまして、私自身が中国経済というものに感じていたイメージをこれほどまでにクリアに書いてくださっている方がいるのだというふうに思いました。もうお一方は、滋賀秀三先生という方で、この方は一橋の先生ではなく東京大学の法学部の先生で、中国法制史のすばらしい研究者でいらつしました。先ほども少し申し上げましたが、私が直接お目にかかって、かつお習いしたこともある先生は滋賀先生だけでございまして、増淵先生、村松先生にはお目にかかったことがございません。今日いらつしやっている皆様の中には直接に増淵、村松両先生を御存じの方がたくさんいらつしやると思いますが、とんちんかなことを申し上げるかもしれない、たいへんドキドキしているのですが、むしろ全然面識がない、単に、純粹に御本の上だけで存じ上げている者が、どういうことを言うのかということをお聞きいただくのも御一興かと思ひまして、間違っているとこはぜひ教えていただければというふうに思っております。

このお三方のご研究に、なぜ私が非常に感銘を受けたかといいますと、それは社会科学的な方法を使いながら、中国社会の個性というものを非常にクリア

に描き出しておられるからでございます。文学部の東洋史というのは、やはり、誰がいつどこでどうしたというような事実問題を実証することが中心で、大きな全体像に至らない場合が多いので、このように社会科学にクリアにお書きになるのは本当に素晴らしいなと思いました。ただ、当時文学部でも社会科学的な議論というものが全くなかったわけではございません。私が大学に入った1970年代は、日本の歴史学界ではやはりマルクス主義の歴史理論が非常に強かったわけでございます。しかし、マルクス主義の歴史理論の場合は、たとえば奴隸制とか封建制というように、外側から社会を見て、それを性格づけていくという形が強かったのに対して、この両先生の場合は、内面的理解といひましょうか、なぜ当時の人々がこういうふうに行動するのかという、それを議論していらつしやる、そこが私としては本当に興味深く思つたわけでございます。この三人の先生とも、マルクス主義的な歴史学に対しては距離をとっておられた。私の先生は、東大文学部の田中正俊先生という方ですが、この田中先生は非常に厳格なマルクス主義の歴史理論に基づく学者でいらつしやいました。もちろん、私は田中先生から計り知れない学恩を受けておりますけれども、中国社会的個性や内面的理解については、やはりこの三先生から非常に影響を受けたと思っております。しかし、その三人の先生の中でお二人はお習ひしたことも、お目にかかったことすらない先生であるわけです。私がなれなれしく村松先生とか、増淵先生などと申し上げると、もし御存命でおられましたら、お前などに先生呼ばわりされる覚えはないとか怒られるかもしれませんが、でも

まあお許しいただきまして、先生というふうに呼ばせていただきたいと思っています。なお、このお二人のご経歴についてですが、私などよりも、よく御存じの皆さまもいらつしやるかとおもいますけれども、一応お二人の略年譜を用意してきましたので、簡単にご紹介したいと思います。

両先生のお生まれは、村松先生は1911年、増淵先生は1916年ということで、お生まれこそ5年違いですが、同じくずっと東京商科大学、一橋大学で研究教育に御尽力されており、お二人の軌跡というのは非常に重なり合っているところがあると思っております。村松先生の略年譜をご覧くださいますと、戦時中は陸軍主計少尉として一時中国大陸におられたようですが、1940年に東京商科大学助教授に、その後は東亜経済研究所の研究員になられています。ちなみに、1949年には、この年は中華人民共和国が成立した年ですけれども、一橋大学の端艇部部長に就任され、その後お亡くなりになるまで部長の職を務められたと伺っております。当時の一橋大学の端艇部、つまりボート部は、今でもそうだと思いますが、何回もエイトやフォアで全国制覇をするなど、非常に活躍していたそうです。ずっとお亡くなりになるまで端艇部部長を務められたと伺っています。このフォーラムのコーディネーターをやっておられたしゃいます加藤博さんも、端艇部、つまりボート部でボックスをやっておられた経歴をお持ちでして、この点でも加藤さんは村松先生と浅からぬお付き合いをしておられたのだと思います。村松先生は、端艇部部長に就任された年に『中国

経済の社会態制』という御本をお書きになりました。今日お話ししたいのがこの御本についてでございます。中国の経済について、非常に切れ味の鋭い見取り図を描かれた本であると思います。その後はずっと一橋にお勤めになり、1962年に一橋大学から経済学の博士号を授与されておられますけれども、そのご研究は「清末江南地主制の史料的研究」という題で、『中国経済の社会体制』とはかなり性格が違い、原史料を大量にお使いになりまして、清末の地主の経営制度についてご研究になった本でございます。この御本で学士院賞をおとりになったほか、この御本の一部がアメリカなどでも英語で翻訳されて出ておりまして、非常に海外でも有名な研究でございます。1963年には一橋大学経済学部長になられたほか、1969年、大学紛争の頃には当時の学長の増田四郎先生が体調を崩されていたということで、学長代行にもなっておられます。その後、1974年、ご退官予定の直前に逝去されました。

一方、増淵先生のほうは、1916年のお生まれで、1940年に東京商科大学を卒業しておられます。御承知かとは思いますが、増淵先生はもと中国史ではなくて、西洋史、特に中世ドイツ史を専攻しておられました。ご卒業後は、福島高等商業学校でドイツ語の先生をしておられました。研究をしたということとで東京商科大学にお戻りになりまして、今度は中国史を専攻されました。1945年に東京商科大学助教授に着任された後、1951年に出ましたのが「漢代における民間秩序の構造と任侠的習俗」、これは大変有名な画期的な御論文でございます。これを含めた増淵先生の御論文を集めた御本が

1960年に出版した、『中国古代の社会と国家』という御本です。今日は、これについてのお話をさせていただきたいと思えます。増淵先生は、中国古代史研究のかたわら、1963年に、「日本の近代史学史における中国と日本」という御論文を出しておられます。これは、有名な内藤湖南や津田左右吉といった、日本史も含めたアジア史研究の大家の方々が持っていた中国観、日本観を扱われたものでありまして、これもまた本当に素晴らしい御論文でございます。これに代表されるような、研究者の姿勢を問うような御論文もたくさん書かれております。その後、増淵先生は1970年に一橋大学社会学部長、1975年に同付属図書館長を歴任された後、1979年に退官なさいまして、1980年に逝去されました。

さて、これから、なぜ私がこの両先生のご研究に非常に感銘を受けたかということについてお話ししたいと思えます。以下ずっと引用が続くので、引用文だけでお話するような形になってしまつて申し訳ないとは思いますが、実は私は、両先生の文章は、端正な素晴らしい文章だと思っておりますので、変にまとめるよりは、その文章をご覧いただきたいということもございまして、少し長く引用させていただきます。

今日お話しする両先生の御本のうち、早く出たのは村松先生の『中国経済の社会態制』という、1949年に東洋経済新報社から出た御本でございます。この本の序文は、昭和24年つまり1949年の5月17日に書かれております。

この年がどういう年かといいますと、中華人民共和国が1949年の10月1日に成立しておりますので、村松先生がこの序文をお書きになっていた頃は、まさに中国共産党軍が中国全土を支配下に入れつつあったときであるわけです。ちょっと読んでみますと、

この小さな書物を自分が書き始めたとき、新聞やラジオは京津の戦況を報道していた。自分のたどたどしい筆の進みを追いこして、赤旗は大運河地帯を風のように南下し、中共軍は明日にも上海に入りそうな形勢である。辛亥革命の時にも、国民革命の時にもそうであったが、この国の政治革命の足はいつも異常に早い。なお多少の葛藤は免れないにしても、中共軍が中国本土の東部一帯を掌握する日は近いと見ることができよう。(iii頁)

ということ、いわば政治的には中国共産党は中国全土をすみやかに支配下に入れるであろうと述べています。しかし、その後はどうなるか。村松先生は次のように続けます。

しかし中共のいわゆる新民主主義革命は、用兵完了の日に成るのではなくて、実はその時に始まるのである。この膨大な農業国を資本化し、やがて中共究極の目的であるその社会化への道を開くという課題は、明日の事業として彼等の肩に背負わされている。…従来の経済社会態制に対する最大限度の寛容を通じて、おもむろにその再編を図ろうとする中共の態度は、決して単に一時的な民心安定策に出でたものではない。それほどこの国の経済社会態制の革新には大きな障害と困難とが横たわっているのだと見

なくてはならぬ。(iii頁)

つまり中国の長い歴史をもつ膨大な経済というものが、いかに手ごわいものであるかということ、を村松先生は強調していらつしやるわけです。簡単な政治的な革命ですぐに改革できるようなものではないであろう。結局どうであつたかということとは後でちよつと考えてみたいと思いますが。さて本書の視角について村松先生は、

本書は結局そのような中国経済の伝統的な態制、その社会的な制度的な枠組の考究を通じて明日の中共経済のあり方を間接的に考えようとしたものであるが、そこで絶えず人の用いる「封建的」という用語の使用を避けたのは、近代ヨーロッパ的でない、産業資本主義的でない経済のあり方にも、国によつて様々な相違があり得ることを考えたからである。勿論現実を要約し整序するための、段階概念の有用さを否定しようとするのではない。しかし少なくとも同様に「封建的」心情の残存が問題にされている日本の場合と比較すれば、中国のそれがどれほど個性的な傾斜をもつものであるかは自ら明らかであろう。：西欧の歴史的発展から抽出された段階構成を一度離れて、虚心に在来中国社会構造と西欧的―世界的なものとの距離の測定を志すべきだと考えたからである。(iv頁)

というふうに言われております。御承知のように、中国共産党自身は、当時の中華民国期の経済というものを半封建的なものと規定しておりました。なぜ封建的かといいますと、地主制というものが広範に存在し、その地主制のもとで

は小作人が地主に対して生産物の半分くらいにも達するような非常に高い地代を払わなくてはならない。これは決して資本主義的な資本―賃労働関係ではなく、ヨーロッパでいえば封建的な段階にあたる。もちろん資本主義的な要素も入っているにせよ、生産の大部分を占める農業においては封建的である、そういうふうな規定をしておりましたわけです。しかしそういう規定では中国の経済の在り方は捉えられない。「個性的」という言葉が使っておりますけれども、ヨーロッパのモデルではなくて、いかに中国の個性的なあり方を捉えるか、それがこの御本の主題であつたというふうに思います。

その後第一章で村松先生は、この御本の方法について書いておられますが、これが非常に興味深いものであります。どのように書いていらつしやるかといえますと、経済を観察する方法として、数字による統計から見る方法と、経済主体間の社会的な関係、すなわち狭義の態制を追及する方法とがあるが、後者の中にもまた二つの側面がある。ここで村松先生が言うところの二つの側面とは、一つは、外部的、規制的な秩序であつて、例えば国家の法律とか、社会的慣行などであります。また、もう一つは、内部的、組織的な秩序であつて、合資組織、すなわち何人かの人が資本を出し合つて一緒に経営する組織ですとか、家内工業、問屋制度などあります。村松先生の言葉によりますと、

そのような（外部的な秩序を指す――引用者）特定の法的―慣行的な秩序の間に、個々の経済主体は無数の為し得べきこと、為し得べからざること……の体系によつて制約され、互いに結合せられる。広い意味で社会規範と

か社会倫理とかいう言葉が、そのような体系を指すものだといってもよいであろう。あるいはそれがいつか個々の経済主体の行動をほとんど反射的に左右し、特定の社会における個々の成員の生活に一種独特のリズムを与えるということを考えれば、これと表裏一体をなすものとして、特定の社会の「心意」とか、「国体意識」とか、「生活感覚」とかいうものを考えることも可能である。

中国経済全体を競技に例えれば、前に挙げた経済事象の量的側面への投影は、得点のスコアであるし、ここでいう狭義の外部的態制、個々の経済主体を制約する社会的規範は、中国経済に特有な「競技規則」だとも見られよう。；そしてその様な外部的な、規制的な枠の中に、狭義の態制の第一のものが見出されると共に、これに応じて、これに則して、その中で個々の経済主体が、その経済的行為の効果を拡充し、強化し、確保するために造る人の配置、物の区分、経営及び生活の内部的規制の秩序、つまり上に言う態制の第二の面が見られることになるのである。競技についての前の比喩を再度持ち出せば、これはポジションの決定、練習のスケジュール、試合に際してのチームの編成に当たるであろう。(13—14頁)

このような言い方をされています。いわゆる競技にたとえる、こういう例え方を考えてみますと、これは例えば当時の社会を封建的と見るような考え方に對してそれとは大いに異なる特色をもっているように思えます。つまり、封建的と見る場合は、なぜその当時の人たちがそういう形で行動するのかというより

は、やはりそこに地主制というものがあるからにはこれはもう封建的だ、そういう外からの規定になつてくるわけですが、村松先生の場合は、中国で生産や流通に携わる、経済の中で動いている人々を一種の競技のプレイヤーと捉え、彼らがどのようにしてこのように行動するのかということを考えようとされているのだと思います。競技といいますと、やはりゲーム理論が思い浮かぶわけですが、ゲーム理論について、私は詳しいことは存じ上げないのですが、ゲーム理論とは一般的に、合理的な行動をする抽象的な人間というものを思い浮かべて、彼らがある条件のもとでどういうふうに動いていくかということを考えるのが普通であらうかと思つております。ただ、村松先生の場合は、そのプレイヤーが、抽象的な、いわゆる利潤の最大化を目指すようなかたちのモデルとして考えられているのではなくて、中国という特定の社会の倫理を内面化している、つまり自分の中に一種の本能に近いものとして、特定の「心意」即ちメンタリテイをもち、社会に対する特有の見方や、行動の仕方を身に付けた者として考えておられるわけですね。このような文化的な色彩を帯びたプレイヤーのモデルというのは、最近になるまで経済学の中では考えてこられなかったのではないかと思います。その点、村松先生の方法というのは非常に新しいと言いましようか、優れたものであったのではないかと思います。

さらに、外部的な規制、つまり試合におけるルールにあたるものと、試合において人々が勝つたためにとる様々な戦略、たとえば碁でいえば定石にあたるものを区別されたということも、非常に面白いことではないかと思ひます。それ

では、村松先生が具体的に中国のルールとか、動き方をどういうふうに考えていらつしやったのかということについて、全部はともお話できませんが、割合代表的なところを少しかいつまんで例をあげさせていただきます。まず、外部的な規制のあり方から見て行きますと、そもそも通常、経済的な秩序をつくっていくために非常に重要な役割を果たすものは政府ですけれども、その政府というのは、村松先生によれば、

中国の政府の組織には、清代以前から、極めて統一的な、中央集権的な外形の下に、甚だ複元的・分散的な傾向を包蔵していた。そしてそれは中国の「政府」あるいは官僚制度のうちで、中国の個々の官吏が示す極めて個別主義的な、私人的な行動態様と結びついている。(110頁)

と、こういうふうに言われております。中国では御承知のように、紀元前3世紀の終わりに秦の始皇帝が中国を統一して以来、皇帝政治が二千年あまり続きましたが、そこでは、皇帝の下に大規模な官僚組織が作られ、それが中国のすみずみまで統治する、そういう原則になっているわけです。日本やヨーロッパと比べるとずっと早期からこうした官僚制度というものが発達している。しかし、この官僚制度をもつて中国の社会の末端まで統治していたかというところがある。かつ、官僚制度というのも、現在の官僚制度というところで私たちが思い浮かべるような、体系的な官僚規則にのっとったシステムと考えることはできないわけで、個々の官僚が自分の計算で、たとえば税金でしたら、少

し多めにとつて自分のポケットに入れるといった算段をしながら動かしていく、そういうシステムである。いつてみれば個々の官僚というのはシステムの中の一つの歯車では必ずしもなくて、極端に言えばむしろ個々の官僚が、統治という仕事を請け負つて、自分の計算で営業しているような状況であつたと考えてみるができると思います。ですから、たとえば現代の中国でも問題になつてゐるような、汚職やわいろとか、そういうものは中国の官僚制度とは切り離せないものとしてずっと昔から存在していたといえるでしょう。

さらに、官僚制度によつて治められる社会のありさまを見てみますと、中国社会というものは一般的にいつて、儒教道徳に縛られた不自由な社会というように見なされてゐるのではないでしょうか。人々の生活を規定するものとして、血縁団体や地縁団体があり、それらは中間的諸団体とまとめていわれますが、そのなかで中国社会の特色と看做されているものに、たとえば宗族というものがあります。これは、一人の祖先から出てきた子孫たちが自分たちは同族であるという意識をもつてお互いに助け合う、男系の血縁団体です。これがとくに明清時代の中国では、非常に発達しておりまして、大きいものであると千人以上になるような宗族が存在しているわけです。同族村落といつて、そうした宗族を中心に成り立っている村の結合も極めて強いものがあります。それからあるとはギルド、同業者の団体ですね。こういう団体が非常に強い力を持つてゐる場合もかなりありますので、中国社会というものを外から観察すると、中国の社会というのは団体が強い。つまり個人の行動が自由でなくて、このような村

とか、宗族といった血縁団体とかギルドとかに縛られたなかで生活しているようにも見えるわけです。多くの研究者はそういう状態をヨーロッパなどのいわゆる封建制時代の村落などになぞらえまして、一種の前近代的な共同体と見なしてきました。ところが村松先生はそういう見方に対して大きく異なる見方を提示しておられる。どういうふうに論じておられるかと申しますと、激しい競争の中で、個々人が利益を守るために集団を形成したものととしてこれらの団体を理解すべきだということです。つまり、個々人が自由に行動したいのにそれを縛る枠としてこういう団体があるのではなくて、むしろ激しい競争があるために、その中でお互いに助け合ったり、没落を防いだりするためには、誰かにたよらなくてはならない。助け合いの団体をつくらなくてはならない。そのために、むしろ積極的に個々人が団体を作っていく。村松先生によれば、中国社会には、一見すると矛盾するように見える二つの特色がある。すなわち、

一つは徹底した自由競争的な形である。他の一つは逆にそこでは市場活動が絶えず狭隘な、私人的保証の範囲に制約せられ、人的関係をたどつてなければ行われないという古風な形姿である。「自由競争」と「私人的保証」という一見矛盾するとき二つの事態が、ここに併行しうるのは、ここで人的制約とか人的保証というものが、決して自由な経済的意思の決定を抑圧する経済外的な「伝統」や、身分的な制約によって課されたものでないという事情に基づく。むしろそのように経済を外部から規制し、制約する秩序が、「統治」によっても、「身分」によっても、「伝統」によっても、

与えられていないということの内に、一方では最も市場的な、極度に自由な価格競争の行われる理由があり、同時に正に同じ点に、その様な市場秩序の保証を、私人的な盟約に求めざるを得ない不安があるのである。(178—179頁)

ということです。少しおわかりにくいかもしれませんが、補足しますと、次のように言えると思います。中国の社会は、一見非常に自由競争的であると同時に、その自由とは、人間関係のしがらみからはなれて好きなように活動できるということではなく、むしろその中では、家族・親族や知り合いの間の非常に強い人間的な関係が、大きな役割を果たしている。そういう逆説がどうして出てくるかというと、それは中国の社会において、人々の活動を支えてくれるルールが、国のレベルであれ、村などのレベルであれ、あまり十分に整備されていないことによるのではないかということです。つまり、個人の経済活動を保証してくれるような法律、例えば契約が破られるなどしたときにそれを処罰してくれるような法律とか、そういうものがあまり整えられていない。また、たとえば商人なら商人の身分があつてその身分に基づいて商業活動をやっているわけではなく、誰でも市場に参入できる。それから商売のやり方に関する慣習的な決まりのようなものが確立しているわけではなくて、いわばなんでもありである。村松先生の言葉によれば、「経済を外部から規制し、制約する秩序がない」「統治」によつても、『身分』によつても、『伝統』によつても、与えられていない」そういう状況の中で手探りで激しい競争が行われているわけです。その

中で生き残つていこうとすると、信頼できる人々の間に絆をつくつて助け合つていく以外に生き残る道はないのだと感じられる、そういうことだと思ひます。いわば、競争的な社会におけるリスクの大きさが、人々を、人間関係による安全確保へと向けて駆り立ててゆくわけです。

さて以上は、中国経済における外部的な規制のあり方について見たわけですが、次に内部的な態制について見てみましょう。内部的な態制というのは、要するに、外部からの規制的な秩序が微弱な中国社会の中で、人々がどういふうな組織を作つて経済活動をやつていくのか、ということですが、これについては様々な例があります。例えば合資経営の例を挙げてみましょう。中国の商工業組織として「合股」などと呼ばれるものがあり、これは、資本を出し合つて商工業経営を行うものですが、そのやり方を見てみますと、村松先生によれば、次のような特色があります。

比較的狭い熟知者の範囲内で結成せられ、それも原則的には一時的・短期的な組合形態を採るばかりで、広範囲からの蓄積を大資本に集中した永続的な株式会社制度が行われるに至らない。(226頁)

さきほど述べたように、中国の伝統社会では経済活動は基本的に自由であつて、資本を持つてゐる人もたくさんゐるわけでありまゝ。しかしそれにもかかわらず、近代のヨーロッパ社会のような大規模な株式会社、すなわち見知らぬ人の間から株式を集めて、資本を集めて大きな会社を作るといふ制度ができなくて、だいたい商工業組織といひますと、知り合いとか親せきの中からお金を

出し合って、しかも一定の利益があがっても、新たにどんどん投資して大きくしていくということをしないで、株主の中で利益をすぐ分配してしまふ。だからそういう会社というのは短命である、長く続かない。そういうことが中国の経済発展を阻害する要因として指摘されてきたわけです。これに対して単に「遅れている」といった評価をするのでなく、「どうしてそうなるか」を考えていくとき、村松先生が言われるのには、

資本の集中は身分的・伝統的・「封建的」な制約が存することによって妨げられるのではない。人的信用すなわち個人的熟知や情誼にたよらなくては、資本授受に必要な安定感の保証が得られず、長期信用の付与に不可欠な社会的信頼の基礎が法制によって与えられていないこと、集中せられた資本が家計計算的な資本所有者によって分散せしめられる所に事態の核心が存すると見るべきである。(226—227頁)

つまり、予測不能でリスクが大きすぎるために、長期的に資本を固定しようとする意欲がわかないのだということです。

それでは全体として、村松先生は、中国の経済態制のその後について、どのような予測を行っておられたのでしょうか。村松先生のこのような考え方からすれば、中国経済の抱えている問題は、革命によって旧体制を打倒し、人々の経済行動を自由に「解放」することによって解決されるのではなく、むしろ、この広大な国に新しい経済秩序を建設することによってこそ、解決されるということになります。それは、簡単にできることではないのであって、中国共産

党はこうした經濟態制を一举に変更しようとはしないであろう、ということが村松先生の予測でした。しかし現在の社會態制が存続するかぎり、經濟の不安定さと貧富の差はなくならないのであつて、この問題を解決するには、長期的かつ根本的な改革が必要である。すなわち、

統治・治安の秩序、行政・經營、生活組織の全面にわたつて、新しい原理と新しい行動規範としたがつて新しい形態とが作り出されなくてはならぬであらう。：中共が單に政權の掌握のみに甘んずるのではなく、社會態制と社會心情との「革命」を完遂する日を遙かに待望しなくてはならぬ。

(264—265頁)

ということになります。以上、村松先生の中國經濟觀の特質をまとめてみると、その非常に示唆的である点の一つは、我々日本人が中國社會に対して持ちがちな、二つの相反するイメージ、そのいずれをも無視することなく、兩方を的確にまとめながら、統一的な論理を出しておられる点にあると思います。その二つのイメージというのは、一つは非常に個人主義的というか、利害打算的といひましようか、いわゆる個人の利害で動いているという面、もう一つは、一見相反するように見えるけれども、人的な結合が非常に強いという面。これは、現代でも、中國などで仕事をなさる方々がよく感じられる面ではないかと思ひます。日本人などに比べて、中國人は各々が他人の真似などせず、また普通はこうするということをあまり氣に掛けずに、自分が得になるといふことを積極的にやつていく。しかしそれにもかかわらず、非常に人的な結合が強い。

逆に言いますと、中国人も日本人をみて、一見相反するイメージを持っているように思われます。中国人から見ると、日本人は集団主義的であると一面ではいわれます。しかし同時に、日本では人間関係がよそよそしい。集団的でありながらよそよそしいというのは変な話ですが、ただ中国人から見ればそうなのです。日本人から見れば逆に、中国人は非常に個人主義的、利害打算的であると同時に人間的結合が強いともいえる。そういうものを西洋的なモデルを基準にして遅れていると考えるのではなくて、不安定な状況に対処するための、それなりに合理的な行動として理解しようというところに村松先生の考え方の核心といひましょうか、一つのポイントがあるのではないかと思います。これがマルクス主義的な発展段階論の考え方ですと、前近代の段階についても、もちろん人々の利益追求というものを無視しているわけではないのですが、ただ個々の生産者の利益追求と、地主制度や社会集団といった社会的な仕組みとが、どちらかというところと相反するものと考えられている。つまり地主制度や社会団体というものは、生産者個々人の自由な活動を縛る枠であって、階級闘争によってその枠を打ちやぶることによって、経済的自由がもたらされるというわけです。村松先生の場合は、むしろそうではなくて、個々人がそういう利益を追求する、別な言い方をすればリスクを回避する活動を活発にやった結果、たとえば村とかギルド、または地主制といった社会的な枠組が表れてくると考えておられるわけです。村松先生は、20世紀前半期の中国経済のさまざまな特徴を、人々の自由な活動を圧迫する枠と捉えるのではなく、むしろ人々の自由な活動

の結果、でてくるものであると理解されていたわけです。

その村松先生の予言といひましようか、つまり中国共産党はこうした経済的状况を簡単には変えられないであろう、変えようとしないうであろう、という予言は当たったのか、といひますと、これは短期的に見れば全く当たっていないと思います。というのは1950年代から中国共産党は急速に社会主義建設をはじめまして、計画経済、集団化を強力に推し進めてゆきます。それによつて、村松先生が強調していたような中国経済の「自由」さは失われ、中国史上例を見ないような統制的な経済体制が作られていったのです。ただこれは、やはり経済的というよりは政治的な状況、すなわち朝鮮戦争がおこり、冷戦が厳しくなりまして、一種の準戦時状況といひましようか、非常時の状況が生じたことが大きいと思われまゝ。そのような外部からの脅威というものをその後数十年にわたつて中国は感じていた。そのなかで、強引とも思われる改革をやつていったのだというふうに思われます。逆に言えば、社会主義化を推進するには、外部からの脅威を強調することが必要だったといえるかもしれません。

一方、長期的に見ますと、冷戦体制がだんだん緩和されてくるに従つて、やはり中国の社会主義体制の無理というものが出てくるわけでして、それで御承知のように今日のようなほとんど資本主義といえるような状況になつてきているわけです。ただ、その現代の中国の経済というのは昔に戻つたのかというとそれは決してそうではありません。村松先生がおっしゃっているような、なかなか大きな会社ができないというような状況は今全然ないといひましようか、

十分に大きな会社ができて、非常に資本主義的な活動をして、どんどん経済成長しているという状況であります。では、長期的に見ても村松先生のおっしゃっていることは当たっていないのかというと、これも何とも言えないのでありまして、どうして今の中国経済がこのように急速に成長しているかというと、それはやはり社会主義時代に、国家の統治体制が社会の末端までゆきどき、無理にでもさまざまな公共的なインフラ整備をやった。その結果、中華民国時代とは非常に違った状況ができてきた。中華民国時代といえば、対外的にも国内的にも政治抗争がつづき、不安、リスクに満ちた状況でありました。現代の中国ももちろんリスクといえれば大いにあるとは思いますが、やはり中華民国時代とは非常に違う、安定した状況ができてきたということがある意味では現在の発展を支えているのかなと思います。ただ、外部的な秩序は相当程度に確立されたとしても、村松先生の強調された「新しい行動規範」「社会心情」、すなわち自由経済を秩序あるものとしてなりたたせるルール感覚のようなものが、一般の人々の間に必ずしも十分に内面化されていないために、経済的な自由さというものが、ともすれば経済秩序をゆるがす不正行為といった形で出てきやすい。そのなかで経済秩序を確立しようと思えば、政府の強行的な介入という形にならざるを得ないのですが、その政府においても、村松先生のいわれた「官僚の私人的な行動態様」が現在でも尾を引いていて、汚職事件などが人々の怨嗟の的となっている。全体としてこういう状況のなかで、社会主義時代には抑えられていた自由な経済活動へのエネルギーが爆発的に拡大してきている

ということか、と思います。

そういう意味では、村松先生の予言は、短期的には当たらなかったように思いますが、長期的には当たっているといえます。中国のこうした自由経済の底力、及びその内包する一種の不安定性といったものは、現在も強く感じられることではないかなと思っております。ただやはり、村松先生がこの本をお書きになった20世紀半ばの状況では、やはりマルクス主義的な理論、中国共産党自身が採用していた理論からいいますと、社会主義というものが、中国の抱えていた問題を一気に解決するものと考えられていた。日本の学界でもそのように考える人が多かった。そのために、『中国経済の社会態制』における村松先生の理論は、いわば、新中国の革命的な発展をとらえきれなかった議論とみなされ、その後の先生の租棧研究の陰に隠れてしまうことになったのだと思われまふ。村松先生のご逝去に際して追悼文を書かれたマイアミ大学のラモン・マイヤース(Ramon Myers)教授は、『中国経済の社会態制』に関して、「この高度にオリジナルな研究は西洋ではほとんど注目されず、また戦後世代の日本の研究者が本書によって、村松教授の示唆した枠組を用いた近代中国の社会経済システムの分析を行うよう鼓舞されることも全くなかった」と述べておられます。ただ、中国社会の「自由さ」と「不安定性」をいわばキー概念として、ヨーロッパと異なる中国経済秩序の「個性」を論じようとする村松先生の研究は、当時決して孤立したものではなかったことを申し上げておきたいと思えます。その代表例として、京都大学の農業経済の教授、柏祐賢氏——柏先生は、

台湾の李登輝さんが日本に留学していた時の先生ですが——の『経済秩序個性論』（1947—1948）が挙げられます。この御本について、今日はお話する時間がありませんが、これも大変迫力のある研究であって、村松先生の御本と重なりあう中国経済像を描いております。しかし、こうした研究が、新中国の発展を予言し損ねた停滞論・類型論として批判される状況が、当時はあったわけです。

興味深いことに、村松先生の『中国経済の社会態制』については、これからお話しします増淵龍夫先生が、書評を書いておられます（『一橋論叢』22—5、1949）。その書評によれば、本書からは「借り物の方法などによって曇らされていない」著者の「透徹した眼光」を感じることができると述べています。しかし著者の内面に観得された主観的形姿を客観的に概念化する方法が曖昧である。西欧近代社会とのコントラストにおいて中国固有の「態制」を把握しようとするならば、その様な比較を行うための共通の基準、共通の場がより高次の問題視野の下に選び定められなければならない。ということ、増淵先生は、その高次の問題視野として、マックス・ウェーバーの理念型論などを挙げておられます。こうしたいわば「理論武装」という面では、当時、マックス・ウェーバーに凝っていた柏先生が、『経済秩序個性論』全3巻の第1巻をまるまる理論的検討に当てておられる（あとの2、3巻は中国経済の分析）のに比べると、村松先生の研究はたしかに、比較的さらりと触れているに止まります。村松先生の方法は、現在読んでも非常に新しい感じを覚えるもので、近年、慶応義塾大学の経

済史の古田和子さんが、「村松が戦後直後の1940年代後半に中国経済の分析に用いた手法は、今日でいえばまさしく比較制度分析の方法であった。村松がその著書『中国経済の社会態制』において展開した中国経済論は、その意味からも当時の中国経済論のなかで出色であった」（古田「中国における市場・仲介・情報」三浦徹他編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』東京大学出版会、2004、207頁）と評価しておられるほどなのですが、村松先生が、その後、方法論を構築するほうに進まねず、むしろ、極めて史料実証的な研究のほうに向かつてゆかれたのは、興味深いことであると思います。

さて次に、増淵龍夫先生のご研究の紹介に進みたいと思います。増淵先生の主著は、衆目の一致するところ、1960年に弘文堂から出版されました『中国古代の社会と国家』ですが、これは、1951年以来発表してこられた論文をまとめた論文集であります。この御本は、名著の誉れ高いにもかかわらず、しばらく絶版になっておりましたが、1996年に岩波書店から、増補改訂版が出版されました。以下、引用の際には、増補改訂版のほうのページ数を表記させていただきます。

まず、本書の序論で、増淵先生は、ご自分の研究の方法について、かなり詳しく述べておられますが、そこには、当時のいわゆる理論的な中国研究の枠組みとなっていた、西洋基準の理論構成を排して、中国社会をその内側からとらえようとする、先生の視角がはつきりと表明されています。もつとも、増淵先生の批判対象であった西洋基準の理論構成といっても、それは必ずしも単一の

ものではなく、相互に対立するいくつかの流れがあつたということができません。ひとつは、理念化された西欧の歴史発展をいわば「正しい」歴史のコースと見なした上で、中国などアジア社会を、それとは本質的に異なる社会と見なし、そこには歴史の発展はありえない、とする見方です。「アジア的専制政治」や「アジア的共同体」の存在を強調するこのような「アジア社会停滞論」は、戦前の日本でもある程度の力をもっていました。それに対し、戦後の日本の学界では、このような「アジア社会停滞論」に対し、強い批判が起こり、中国などアジア社会も、西欧と同様、発展をとげていたのだ、という議論が主流になりました。すなわち、「アジア社会停滞論」は、ヨーロッパ列強（及びヨーロッパ）にならって近代化し得たと自負していた日本（がアジア諸地域に植民地的侵略を行ってゆく際の支柱となった理論であり、そうした理論は、日本の敗戦や戦後のアジアの独立の動きによってすでに破産しているのだ、という考え方です。ただ、アジア社会の「発展」を強調するこうした考え方にあつても、その「発展」の論証としては、ヨーロッパの歴史から抽出された、奴隸制、封建制、といった発展段階のモデルをアジア社会に適用するという方法が主にとられていたために、アジア諸地域の現実の歴史には当てはまらないことも多く、説得的な歴史像を描くことが困難であつたのです。すなわち、アジア社会は西洋と本質的に違うのだ、という停滞論の考え方も、また、それを批判してアジア社会の発展を強調する考え方も、実はどちらも、西洋の眼鏡でアジア社会を見るというゆがみを免れなかったものといえます。増淵先生が取り組もうとしたのは、こう

した状況をいかに乗り越えるか、という問題だったといえるでしょう。

増淵先生がこの本のなかで主に扱っているのは、春秋戦国時代から秦による中国統一を経て次の漢の時代まで、すなわち、紀元前8世紀から紀元後2世紀くらいまで、それ以前の民族的で分権的な政治体制が崩れて、皇帝をいただく官僚制による統一国家が確立されるまでの時代です。増淵先生によれば、本書の目的は次のようなものでした。

〔ここで私は、春秋戦国時代における——引用者〕氏族制的邑共同体の崩壊過程のなから生まれてくる新しい社会構成を、奴隸制あるいは封建制という普遍的概念で一義的に規定する前に、そのような新しい社会構成の基底に、すなわち、そこに形成されてくる諸々の家父長制的集団のとする政治的・社会的・経済的諸関係の基底に、奴隸制或は農奴制というような普遍的概念では必ずしも一義的に規定できない、固有な人的結合の習俗的關係が、広く作用しており、それが同時に、これらの家父長的諸集団を固有な形で内面からささえていることを、明らかにしようとした……。(29頁)

漢代の国家機構、殊にはその地方統治機構については、従来きわめてすぐれた諸研究が、それを明らかにしている。しかしながら、そこで明らかにされたことは、主として法制的な外郭的機構の詳細であって、いわばそれは定められた規則の示す生活の骨格にほかならない。現実には、そのような骨格の中で、具体的な生活が、それぞれ固有の目的・動機、固有な生活感情をもつていとなまれる。それはしばしば規則的な機構と相反する動機、

それと矛盾衝突する情念によつてささえられ、その間にきわめて複雑なそして固有な現実の生活形態を成立させているのである。このような具体的な目的・動機や生活感情に現れる行為者の心的態度こそ、生活の外郭的機構にはじめて生きた血と肉とを与えているものであつて、このような具體的生活のいわば不可量的な要素こそ、時代なり民族なりの固有の性格をいろづけているのである。……どのようにすれば、そのような具體的生活のいわば不可量的要素をば、すでに明らかにされた生活の外郭的機構との適応關係において、とらえることができるだろうか。(77—78頁)

中国古代の人々のこのような「生きた」生活感情をとらえる糸口として、増淵先生がまず取り上げたのが、『史記』の游侠列伝でした。游侠とは、まあ日本でいえば、やくざのことですが、漢代に書かれた司馬遷の『史記』では、こうした市井の游侠についても、伝が立てられています。これら游侠仲間を結びつける絆を増淵氏は「任侠的結合」と名づけ、それが本書の一つのキーワードとなっています。「任侠」といえば、我々日本人ですと、一時期華やかであつた任侠映画などを思い浮かべますが、任侠というのは、中国の古代にも存在した、古い言葉です。それでは、「任侠的結合」とは、どのようなものなのでしょうか。

司馬遷が游侠列伝においてほめたたえた游侠の倫理、すなわち、あの然諾を重んじ身をもって人の窮を救う所謂游侠の精神というものは、それを機能的にみる場合、一つのきわめて重要な社会關係をささえる精神的紐帯を意味するものである……。すなわち、朱家・劇孟・郭解らの布衣の游侠が、

民間においてもつ隠然たる勢力は、一に、人のために仇を報じ、その庇護を求めて集まる亡命罪人らを身をもつてかくまい、「客」として養う、所謂任侠の精神によつてむすばれる、強固なそして広範な人間関係にある。
：（80頁）

そのような游侠の精神が広まつてゆく背景をなしたのは、増淵先生によれば、春秋戦国時代の大きな社会変動でありました。すなわち、春秋戦国時代には、血縁的な紐帯によつて結ばれた世襲貴族の支配体制がくずれ、頼るものを持たない游民層が生まれるとともに、下層民が台頭してゆきます。支配階層はこのような情勢に対応して、これらの游民たちを自らの私属として養い、勢力を拡大しようとする。いわゆる「食客三千人」といわれるような有力者が出てくるわけです。

かれら游民はみずからのもつ個人的材能のみをたよりに、何らかの有力者に寄食しなければならぬわけであつて、その知識分子は文学游説の士として、武行侠勇を誇る活動分子は任侠好勇の士として、それぞれ新しい勢力関係のなかに吸収されていったのである。：（83頁）

主人と食客との間には、「士は己を知る者のために死す」すなわち、自分の価値を認めてくれる主人のためなら命も捨てるといった、強い結び付きが生まれます。しかし、自分の価値を認めてくれない、待遇が悪い、といった場合には、食客たちはさつさと去つてゆく、そのような結合のもろさも、当時の主従関係のもう一つの側面です。

利害關係に基づく食客門下の離合集散は、より確實な庇護を求めようとする游民の動きの表われであり、それは万人が安んじて依拠し得るような客觀的秩序の欠如を物語る戦国以降の固有な社会的条件から発するのである。そのような条件のもとにおいては具體的な人と人とのつながりを求める以外には自己を守る秩序はない。郷曲の豪俠が劍を帯びて節を立て、もつて徒党を集めるのも、權門の貴族が貴賤をとわず争つてこれら游俠を養うのも、いずれも自己の族的結合の外延にパトリアルカール（家父長的引用者）な人的結合關係をひろげて行くことによつて、自衛的な強者の秩序を形成しようとするものであつて、任俠の氣節とは、このような現實の關係のなから生れてきた積極的な秩序規範にほかならない。（89頁）

増淵先生によれば、安定した血縁的な秩序が崩れて、人々がばらばらに広い社会に放り出されていった状況のなかから、このような人と人との結び付きが生まれてくる。それでは、そうした結び付きは、かつての血縁的秩序に代わる新しい公的秩序を生みだしてゆくことができるのか。これが、増淵先生の追求したもう一つの大きな課題であつたといえます。このような「任俠的結合」は、仲間のためなら命も捨てる、いわばやくざの道徳のようなものですから、秩序を安定させるというよりは、むしろ争いを激化させる側面を持つていたことは当然であります。

以上の諸例にみられる特有な人的結合の關係は、いわば暴虎憑河の下級武士の、与えられた恩義のためには死をもつて報じ、人から受けた委託は死

をもつて果す、という「言信にして行果なる」実行力と素朴な生活感情によつてささえられているものであるが、……宗法的秩序を根幹とする公的秩序とか、全体的秩序とかを問題にする後世の儒者からは、「私家の爲めに力を尽し其の養の恩を貪る、大義に明らかならず」……といわれるように、必ずしも是認されない。それはまづ、主従の約をむすんだ個人と個人との間だけの関係であり、なんらかの意味で、託し、託される人となとの間だけの行動的な関係であつて、それがそれ以外の人々に対してどのような影響を与えるかというような全体的秩序への考慮とか思弁とかとはまづたゞく関係がないからである。(150頁)

しかし、このような任侠集団が、自分たちの一心同体的な仲間意識を全社会的に拡大して、すべての人々が仲間内となる理想社会を思い描くとき、その理想社会はどのような姿で現れるでしょうか。増淵先生は、戦国時代初期の思想家である墨子の学団のなかに、その例を見ています。墨子は、血縁関係を超越した博愛(「兼愛」)を説いたために、家族道德を重んずる儒家の思想家からは論敵と看做されていましたが、墨子の集団は、単なる学者の集まりではなく、守城技術に優れ、戦闘にもたずさわる技術者集団であつたと言われています。絶えず命の危険にさらされている戦闘集団でありますから、親だ子供だなどと言つていられない、実力あるリーダーのもとに固く結集して仲間のためには命も捨てる、任侠的気風の集団であり、「墨侠」という言い方もありました。墨子の「兼愛」説は、そうした社会的結合のなかで生まれてきたわけです。

そのような具体固有な社会関係とそれをささえる習俗的規範や生活感情を抽象化し、すべての人間関係にまで普遍化すると墨子の兼愛説になるのではないだろうか……。現実には……具体的限定をとらざるを得ない「党」内の人的関係の道徳を、すべての人間関係の道徳にまでおしひろげることによつて全体的秩序を考えようとするところに兼愛説の抽象性があり、……：そのような抽象性をカバーし、その実効性を確保するためには、別に權威と根拠を他に求めなければならなかったのである。それが、法による賞罰をもつてする兼愛の強制であり、さらには呪術的崇拜の対象としての天鬼の意志に、その究極の根拠がおかれたのである。……墨子は、天下のすべての人に賞罰をもつて強制しておのれを無にして天子に尚同させることによつて、尚同一義の世界を実現しようとしたのである。天子と民との間には仲介的存在のなんらの特権も許さない一方的な天子専制の政治秩序の世界が同時に兼愛の世界として観念されている所以である。（160—163頁）

増淵先生は、「任侠的結合」をキーワードに、中国古代の人々の生活感情を切実な共感をもつて生き生きと描き出しましたが、その研究の射程は、単に古代史の一側面を明らかにしたというのみに止まりません。村松先生も述べられていたように、中国では、公的な秩序の弱さと表裏して、往々にして強い人的結合が発達します。しかしそうした結合は、全体的な秩序の形成へと結びついていけるのか。結びついていけるとすれば、その全体秩序はどのような性格の

ものとなるのか。増淵先生の研究は、そうした中国社会における秩序のあり方についての、鋭い問題提起であったと、私には思われます。

村松先生の『中国経済の社会態制』に比べますと、増淵先生のこの御本は、学界で非常に注目され、特に当時の代表的な研究者であった西嶋定生先生との一種の論争という形で、大きな波紋を巻き起こしました。これは「西嶋―増淵論争」ともいわれまして、現代の若い人が卒論などを書く時にもふまえておかなければならぬような、研究史上の重要事項となっておりますが、このお二人の違いをひとことと言うと、西嶋先生が、国家のコントロールの下の秩序というものを重視したのに対して、増淵先生は民間の側から人と人の間の結びつきを重視したという対比、いわば国家か民間かの対比という形で一般に理解されているように思います。ただ、私自身は、国家か民間かといった対比については、増淵先生の御本を読んだときには、あまり関心がありませんでした。むしろその時、私を感じましたことはエーリッヒ・フロムという学者が『自由からの逃走』（原著1941年、邦訳、日高六郎訳、1951年）という本の中で展開した議論と、増淵先生の議論が非常に似ていて面白いなということでした。『自由からの逃走』という書物は、中国古代史とは何の関係もない本であります、非常に有名な本で、当時は必読文献とされていたかと思えます。要するに社会心理学の研究者であるフロムが、ナチズムというものがどうして出てきたのかについて考察したものであります。『自由からの逃走』という逆説的な題が示しますように、ここでは、ナチズムの社会的背景として、根無し草的な「自

由」というものが注目されている。すなわち、当時のドイツでは、近代化、工業化の中で、自分の慣れ親しんだ村から都会に出てきて、根なし草的な不安感を持つている人々がたくさんいる。その時に彼らが何に頼るのかというと、一体感をもてるものを求める。それが例えばナチズムであり、例えば共産主義ボルシェヴィズムのようなものもそのような社会心理から理解できる。ナチズムという人々を抑圧する体制というのは、外から押し付けられたものではなく、むしろ人々が不安感の中で一体感を求める衝動から出てきたものである、そういうことを議論している本でして、この本の議論と、増淵先生の書かれた、不安感の中で人々が人間関係を作り上げて、それが結局、専制的なシステムへと結びついていくという議論が非常にパラレルで面白いなと思ったわけです。増淵先生の研究の特色は、「国家でなくて民間から」というよりは、むしろ、一種の社会心理的なアプローチにあるように感じられます。

最後に、簡単に村松先生と増淵先生の共通点と違いをまとめておきたいと思います。お二人を並べてみますと、ある意味では驚くほど方法的に共通しているところがある。まず私が感銘を受けましたのは、お二人の先生方の議論の一種の社会科学の性格といいますか、一貫した内的な論理をもって、中国社会というものを構造的にとらえようとする、そういうやり方であります。歴史学ですと、個別実証といえますようか、具体的に何月何日になにがあったという実証がどうしても多くなりますし、理論を用いるといっても、外からあてはめたようになりがちで、実証に即しながら包括的なモデルを説得的に描くという

ことは、やはり歴史学者は苦手な人が多いと思います。といつても、歴史学者ばかりでなく、社会科学の方面で現地調査をなさる方々のなかにも、個別実証的な方もいらつしやいますけれども。村松先生の先生である根岸佶先生も、現地調査をふまえて非常に素晴らしいお仕事になさった方でありますが、村松先生の場合は、むしろ根岸先生の現地調査の中にひらめく、非常に鋭い観察というものを根岸先生以上に体系的にまとめられまして、一貫した内的論理に整理されたものだと思ひまして、そこがまず感銘を受けたわけです。

また方法の面の第二の共通点として、何度も申し上げましたように、西洋モデルを外からあてはめるのではなく、人々はなぜこのように行動するのかという問いに立脚した議論をされている点です。内面的理解というのは、増淵先生の一種のキーワードでもあるわけですが、村松先生にも同様の姿勢を感じます。特に、その内面的理解における人間像というものが抽象的な人間像ではなく、ある社会の固有の心性というものを内面化したような人間像を考えていらつしやる点。そういう点が非常に特色のある点だと考えております。私などが史料を見て漠然と感じていたものを、まさに自分が言いたかったことをクリアに表現されている点、本当にワクワクいたしました。こういうものがおそらく、東京商科大学、一橋大学の伝統なんだろうとは思いますが、私などはそういうことを論ずる資格はないものと思つていますので、ぜひ一橋大学の伝統をよく御存じの先生方に教えていただきたいと思つています。やはり一橋大学の社会科学研究は、戦前から一種の現地感覚と社会科学というものを融合させようとい

う伝統があつたように思うんですね。戦前戦後の日本の社会科学を考えてみますと、戦前には社会学者、法学者、経済学者などが実際に現地に行つて中国の状況をご覧になつて、それをご自分の理論形成に役立たせるといふことがあつたと思いますが、戦後日本の社会科学においてはアジアが不在だつた、これは多くの方がおっしゃつてゐることですが、中国大陸と切り離されてしまひましたし、一方は社会科学はというと、ある意味では非常に欧米的なものになつてしまひ、アジアから発信される社会科学という考えがなくなつてきた。それに對して、やはり一橋大学の場合はそういう、アジア発信の社会科学という伝統があるんじゃないかなと私は思つております。

以上は方法的な面ですが、その結果描かれた中国社会のイメージも、非常に共通してゐると感じられます。それはひと言でいいますと、不安定な社会に生きる人々の不安をベースにして人々の行動を考えると、ことだと思ひます。非常に面白いと思ひますのは、増淵先生が扱われた時代というのは、春秋戦国期、つまり皇帝政治、二千年続く中国の皇帝政治はまだ成立してゐない、あるいは成立しつゝある時代です。村松先生が扱われたのが中華民国期、これは二千年続いた中国の皇帝政治がなくなつてしまつた時代であります。そういう意味では中国史上、最も秩序問題が深刻であつた時代を取り上げられてゐる。その間の二千年というのは安定してゐたのかといひますと、もちろんそうとはいへません。皇帝政治、一見整然とした皇帝支配体制といつても、じつは非常にルーズで弱肉強食的な面はあつたのですが、それでも皇帝支配時代というのは

ひとつの秩序が少なくともモデルとしてはあった。ところが春秋戦国とか中華民国というのはそのモデルがない時代。そういう中で、個人レベルの結合による私的な秩序形成が切実に人々に求められ、その中で団体が形成されていく。しかし、そういう団体が安定した秩序を自動的につくりあげるのではなく、むしろ全体としてはお互いに競争が一層激しくなつて社会の不安定を増幅するような面も出てくるわけですし、集団内部の専制的な性格という、非合理的側面も産みだしてくるわけです。

このように、両先生の研究には、大きな共通点がある一方で、むしろ違う点もあることは確かです。多くの中国研究者は、村松先生と増淵先生は非常に違うタイプの方だと考えているのではないかと思います。それは現代中国に対する態度の相違でありまして、かつてA F問題というものがあり、これはお話しすると長くなるのでお話しませんが、要するに1960年代、冷戦の盛んなりし頃にアメリカのアジア財団、フォード財団という二つの財団が日本の近代中国研究に資金援助をするという話があった。その金額は、当方で1億2千万円という大金だったわけですが、それを受け入れるかどうかというところで日本の中国研究者の間で非常に意見がわれたといひました。反対する人が多かった。特に、学生さんで反対する方が多くて問題になったことがあります。その時に村松先生はいわゆる受け入れ賛成の立場だった。それに対して増淵先生は受け入れ反対の立場であつたとうかがっております。要するに、中国と敵対しているアメリカの資金を受け入れるかどうかという問題であつたわけ

です。ではどうしてこれほどまでにある意味では似た中国像をお持ちでありながら、違った態度が出てきたのかというと、これは私の完全な私見、あるいは想像になりますので、間違っている面もあるかと思いますが、お二人が同じく内面的理解を志向したとしても、現代の中国に対する考え方は非常に異なっていた、そういうこともあるのではないかと思います。つまり、現在の中国、すなわち中華人民共和国の社会主義体制を、村松先生が御本の中で表現されたような、中国社会経済の自然な生理に対して、輸入イデオロギーで統制しようとする無理な体制と見れば、現代中国に対して非常にクールの見方をせざるを得ない。一方で、現在の社会主義中国の、非常に結集の強い、またナショナリズムも強い体制というものを、いわば無理に上から押し付けられたものと考えるのではなく、まさに不安の中で人々が春秋戦国時代につくりあげてきたような、人々のやむにやまれぬ結合の延長上にとらえれば、20世紀の前半に中国が直面していた危機からして、これはやはり単なる抑圧体制としてではなく、人々自身の心情に基づく状況として、非常に共感的に理解できるわけであります。ですので、村松先生の場合は、これは本当に想像ですが、社会主義中国というものを、いわば輸入イデオロギーによる無理な体制とご覧になったのではないかと。それにたいして、むしろ増淵先生のほうは一見無理にも見え、不合理にも見える体制というものも、中国の人々自身のやむにやまれる心情の結果であり、決して軽視するべきものではない。むしろ内面的に理解しなければいけない、そういうふうなお考えだったのかなと想像いたします。

最後に、長くなってしまい申し訳ないのですが、村松先生、増淵先生のご研究というものは、現在の社会科学研究に対しても大きな示唆を与えてくださると思っておりますが、その場合、両先生が示された人間像というものは、中国という範囲の中でのみで考えることができるのか、それともより大きな射程をもっているのか、ということが問題になるように思います。この時期、つまり村松先生、増淵先生がこういう論文をお書きになっていらつしやつた1940年代から1960年代にかけての時期における比較研究とは、ヨーロッパ、或いはせいぜい日本などと比較して、中国と言うものが独特であるのかどうなのか、といった議論が主であつたと思います。しかし、今や中国以外のアジアの諸地域に関する研究が進んでおります。そういうものを見てみますと、ここで村松先生、増淵先生がおつしやつたようなタイプの人間の行動様式はいろいろなところで見られるものであつたということが良く分かります。時にはヨーロッパ、日本の中でも時期によっては見られるものである。そう考えますと、中国の固有の、国民性という議論を超えて、普遍化してみることができのではないだろうか、むしろ中国はこうだという言い方をするよりも、中国発のより普遍的なモデルとして考えていくとても素晴らしいのではないかと思つてゐる次第です。

長くなって申し訳ございませんでした。いろいろ教えていただければと思います。どうもありがとうございます。

司会…岸本先生ありがとうございました。ではただいまのご講演につきまして、ご質問のある方、どうぞ挙手でお知らせください。

質問者…慶應義塾大学で塾長も務められた石川先生という方が、慶應義塾大学の場合は、塾長が交詢社理事長を務められるのですが、その交詢社で講演をされたときに、これは記録も残っておりますが、中国の共産主義というのは、ナショナリズムの変形であって、本当のレーニンやマルクスの共産主義ではないと思うとおっしゃっております。つまりこれはですね、マルクスは、資本主義というのは今の搾取体制から行き詰ると考えた。しかしながら、実際に西欧の資本主義は植民地を作ることによって行き詰まらないですんだと。ただし、中国の場合には、このままいくと植民地になつてしまう。そこで共産主義に興味をもつて、植民地にならないためには、この人口を食わしていくためには、一時的にどうか、ナショナリズムとしてみんなで分け合つていくという共産主義という形をとろうではないか、というようにも考えられると。つまり、中国の共産主義というのは、まったくレーニンの考える共産主義とは違うと石川先生はおっしゃっているわけです。石川先生が、日経の「私の履歴書」に、村松先生と自分は同世代であったと書いておられたんですが、石川先生の考え方を先生はどうお考えですが。

岸本…ありがとうございます。私はやっていますことが少し昔なものですから、

正しいお答えができるかわかりませんが、まさにおっしゃる通りだと思います。中国、ロシアといった、いわば欧米の先進国に比べて遅れた国々が、キャッチアップしていくための一つの手段として社会主義というものがあつたということとは、おそらくおっしゃる通りだと思います。キャッチアップするとはどういうことかと申しますと、資本の原始的蓄積といひましょうか、つまり産業発展の基盤を作っていくときに、やはり先進国と発展途上国が競争しますと、どうしたって先進国に負けるわけですよ。普通に自由貿易をしていればどうしたって負ける。だから、中国のような大きな国は、自給体制といひましょうか、自力更生といひましょうか、要するに国を閉ざして、一つの完結的な体制をつくり、また国の中でも、自由主義だと効率的な資本蓄積ができないので、社会主義的に統制経済をやつて、農業部門から余剰を強制的にとりあげて、それを重工業に重点的に投資する。そうして初めて資本主義国、イギリスとかフランスなどでは非常に長い時間がかかった資本蓄積というものを強制的に短期間にやつてしまうことができる。つまり、中国の場合では、後進国、発展途上国にとつての資本蓄積の手段として社会主義が採用されたという側面があつたと思います。それから、先ほど申しましたように、冷戦という、緊急の状況といひましょうか、追い詰められた状況がありました。さらにもう一つ、中国の伝統的な考え方の中に、やはり貧しいならば貧しいなりにみんなで分け合おうという、一種の社会主義的といひましょうか、そういう思想があつたということも要因としてあつたかなと思います。しかしやはり、確かにマルクスなどが考

えていた、社会主義の発展プロセスとは全然違った形で現実の社会主義というものは出来ているなということは私も感じています。どうもありがとうございます。

質問者…中国の文化大革命、日本のマスコミなどでは毛沢東の文化大革命と言いますけれども、お二人の先生の目から見たときに、文革をどのようにご覧になつていたのかなと興味を持ちました。お二人の先生が文革についてあまり書かれたものはないかもしれませんが、お二方のお考えについて岸本先生はどういうふうに考えていらつしやるのか、そして岸本先生ご自身は文革についてどうお考えになるのかお伺いしたいです。

岸本…文化大革命について、村松先生、増淵先生がどうお考えになつていたのか。実は、私は直接に両先生が書かれているものを拝見したことがないような気がします。おそらくなにかお書きになつてゐると思ひますが、そういうわけでお二人がどうお考えになつてゐたのかについてはつきりと申し上げることはできません。ただ、考えるに、おそらく村松先生は非常に距離をおいて見ていらつしやつたことは確かだと思ひます。増淵先生の場合は、やはり一見不合理に見えるような動きの中に、何らかの中国の人々の一種の主體的な在り方というものを見ようということをお考えになつていらしたので、おそらくは、正面からああいうものはくだらないと批判されることはなかったのではないかと

思います。ですが、実はよくわかりません。申し訳ございません。

私自身はということですが、そうですね、こんな話をしたいかわかりませんが、文化大革命が始まった1966年というのは、ちょうど私が中学の2年生のころでありました。もし、私が中国に生まれていたら、まさに文化大革命に巻き込まれていた世代ということになります。当時、文化大革命のニュースなどを見まして、非常に衝撃を受けました。自分と変わらぬ年代の子どもたちが革命をやっている。私たちの世代が、革命をリアルタイムで見るというのは、文化大革命などが初めてだったわけでした、そういう意味では革命というのはこういうものなんだということ是非常に衝撃と共に感じました。後から考えればですね、非常に中国を混乱に陥れた、とんでもない事件であったということになるんだと思います。ただやはりですね、この文化大革命の一種の理想とでもいいでしょうか、たとえば中国では昔から知識人が力を持ってきたわけですが、文化大革命にはそうした知識人と肉体労働者の間の根深い差別観というものを徹底的にひっくり返そうとした側面もあつたわけです。当時の私と同じ年代の若い人たちの、そういう一種の心情といえます。理想社会を求めるんだという心情自体は、文化大革命が否定された現在でもやはり一つの遺産と言うんでしょうか、こういう考え方があつたんだという、決して忘れないものがあるとおもいます。増淵先生が指摘されたような、自分を捨てて大義に尽くすような、そういう一種の衝動というものが、ある意味では本当に人々の心を動かすものなんだけれども、別の面からみると、非常に残酷な、恐ろしい事

態を生み出していくという一種の逆説みたいなものは文化大革命にも見られることで、それは単に否定してすむというものではなくて、むしろそういう逆説というものが中国の歴史の中にしばしばみられるものなんだということを私は感じる次第です。すみません、きちんとお答えできなくて。

質問者…すみません。時間がもうありませんので。毛沢東の愛読書は『資本論』ではなくて『三国志』だといわれていますし、新中国に対して王朝という表現が用いられるくらいで、やはり新中国になつて以後も、二千年三千年という長い間続いた中国モデルというものが残っているんだろうなと思っております。質問はですね、このお二人の先生のお考えは、私は今日紹介していただいて初めて知った次第ですが、内容についてはいちいち非常に納得しまして、その通りだなと思いつながら聞いていたのですが、新中国、中国人の研究者は、このお二人の先生の研究について、どういうふうに理解し、あるいは評価しているのでしょうか。

岸本…村松先生については、実は中国人の研究者はほとんど知らないと思います。というのは、いわゆる中国からみて友好人士か否かということになると、村松先生は決して友好人士ではなかったんだろうと思います。ですので、私などは非常に村松先生のご議論が興味深いと思っておりますので、中国人の研究者にもお話ししたりすることはありますが、むしろ知られてくるとすればこれか

らではないかと思えます。一方、増淵先生は非常に知られていると思えます。やはり日本でも増淵先生というのと、西嶋増淵というふうにとらえられていると理解されていると思えますし、中国でもそういうふうにとらえられていると思えます。増淵先生の場合は、ご論文もいくつか訳されていると思えます。ですので、知っている人は知っています。ただ、どうも増淵先生は中国古代史研究の中に位置付けられてしまっているようなんです。私としては、増淵先生の議論の射程はもつともつと広いと思うので、いわゆる中国古代史研究の研究者の中に入ってしまったていることをちよつと残念に思っている次第です。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。では今日の講師、岸本先生にもう一度拍手をお願いいたします。ありがとうございます。

岸本美緒（きしもと みお）

1975年 東京大学文学部卒業

1979年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退

1979—81年 東京大学東洋文化研究所助手

1981—89年 お茶の水女子大学文教育学部専任講師、助教授

1989—2007年 東京大学文学部助教授、教授、同大学院人文社会系研

究科教授

2007年—現在 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

専攻 近世中国社会経済史

主たる業績

『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997年

『東アジアの「近世」』山川出版社、1998年

『明清交替と江南社会』東京大学出版会、1999年

村松祐次・増淵龍夫両教授略年譜

	村松祐次教授	増淵龍夫教授	
1911年	東京都八王子市に生まれる		
1916年		栃木県那須郡烏山町に生まれる	
1933年	東京商科大学学部卒業		
1934年	東京商科大学副手		
1935年	東京商科大学助手		
1937年	陸軍主計少尉として中国大陸へ		
1940年	東京商科大学助教授	東京商科大学本科卒業 福島高等商業学校講師(ドイツ語)	日中戦争開始
1941年		東京商科大学東亜経済研究所研究員	太平洋戦争開始
1943年	東京商科大学東亜経済研究所研究員		第二次世界大戦終結
1947年		東京商科大学副手	
1949年	一橋大学端艇部部長 『中国経済の社会態制』	東京商科大学助教授	中華人民共和国成立 一橋大学に校名変更
1950年	一橋大学東京商科大学教授	一橋大学経済学部助教授に配置換	
1951年	一橋大学経済学部教授に配置換	『漢代における民間秩序の構造と任侠的習俗』	
1957年	欧米等に長期出張	一橋大学経済学部教授	
1960年		『中国古代の社会と国家』	
1962年	一橋大学より経済学博士号授与 (『清末江南地主制の史料的研究』)	一橋大学社会学部教授に配置換 一橋大学より経済学博士号授与 (『秦漢帝国成立過程の社会経済史的研究』)	アジア・フォード財団資金問題
1963年	欧米・アジア諸国に出張		
1965年	一橋大学経済学部部長	『日本の近代史学史における中国と日本』	
1966年	メキシコ等に長期出張 『近代中国の租税』	ヨーロッパ・ソ連邦に出張	中国「文化大革命」
1967年	中国訪問、アメリカ出張(ミシガン大学で講義)		大学紛争
1969年	一橋大学長事務取扱		
1970年	UCバークレー校に長期出張	一橋大学社会学部長	
1972年	『近代中国の租税』で日本学士院賞		日中国交正常化
1974年	逝去。享年63。		
1975年	『故村松祐次教授追悼論文集 中国の政治と経済』 『復刊 中国経済の社会態制』	一橋大学附属図書館長	
1976年	『義和団の研究』		
1977年		大学教員訪中団の一員として中国訪問	
1979年		一橋大学退官。名誉教授。	
1980年		成城大学経済学部教授	
1983年		逝去。享年67。	
		『中国史における社会と民衆 増淵龍夫先生退官記念論集』	
		『歴史家の同時代的考察について』	



編業・プロジェクト事務局

〒186-8601 国立市中2-1

一橋大学・東キャンパス

マーキュリータワー 5階3507室

URL: <http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/>

研究代表者：加 藤 博

一橋大学大学院経済学研究科教授

印 刷：ゴトー印刷

イラスト：倉田 一明